

目的 児童の遊びは、児童の生活において重要な活動であり、成長・発達には不可欠なものでありながら、一方では遊ばなくなったといわれている。その一因としては、遊び場の不足、遊び仲間不足、自由時間の不足等が考えられる。そこで本研究では、児童の放課後の生活の実態を通して、遊び場、遊び仲間、遊び時間、遊びの種類を把握するとともに、習いごと、けいこごとの実態及び意識を考察し、遊びに対する影響を明らかにすることを目的とする。

方法 アンケート調査。対象は大阪市内の旧市街地にある小学校の児童4、5、6年生。各学年4クラスの内任意の2クラスを選び行う。計248人。調査方法は、クラス担任を通して配布し、記入後回収した。回収率100%。調査時期1979年11月下旬。調査内容は放課後の過ごし方、遊び仲間、習いごと、けいこごと、放課後の生活に対する評価等。

結果 遊びに費やす時間は戶外での遊びより、室内での遊びが多い。又遊び場は、戶外では「道路」「学校」が中心で、室内では自分の家が多い。又遊び相手や仲間には「ひいり」が多く、異年齢の子とは遊ばない傾向がある。遊びの種類は、体を積極的に動かすものより、静かな遊びが多く、その大部分はテレビ視聴である。

習いごと、けいこごとには、91%の児童が行っており、週平均4回、種類は2種類が多く、習いごとが多く、なかでも学習塾が多い。費やされる時間は、1人1日平均男子6.2分。女子4.4分で男子が多い。そのきっかけは、「親に勧められたから」というのが38%で最も多い。